

国語

(第一回)

注 意

- 一、問題用紙と解答用紙が配られたら、まず**解答用紙の決められたところに座席番号、受験番号、氏名**を書いてください。
- 二、試験開始の合図があるまで、表紙を開けないでください。
- 三、試験開始の合図があったら、問題のページ数を確かめてから始めてください。
- 四、この試験問題は、**十八ページ**あります。ページの不足や乱れがあったら、だまって手をあげてください。
- 五、印刷のはっきりしていないところがあったら、だまって手をあげてください。
- 六、試験終了の合図があったら、すぐに鉛筆を置いてください。
- 七、その後、解答用紙を集めますので、解答用紙を机の上に、表を上にして置いてください。
(問題用紙は持ち帰ってかまいません。)
- 八、国語の試験時間は**四〇分**です。

一 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

これまで、忠誠に従順であることや服従しがちな精神的態度とほぼ同じ意味であるという前提で話を進めてきました。しかし、実は、忠誠心を持つということと従順であるということは同じではありません。忠誠心を抱くからこそ、忠誠を誓う対象に反抗するということもあるのです。

この忠誠心と不服従との間の逆説的な関係について理解するのに、アルバート・ハーシュマンという経済学者が提唱した忠誠心の理論が役立ちます。ハーシュマンは経済学者であって、倫理学者ではありません。そのため、彼にとって忠誠心の問題とは、道徳的に正しいかどうかではなく、人間は利益を最大化し損失を最小化するという前提をもとに、忠誠心の問題はどのような態度や行動として理解できるか、というものでした。

そこで、忠誠心を理論化するにあたり、衰退しつつある組織、倒産の危機にある企業を想定し、そのような組織や企業で人はどのように忠誠心を示すか、をハーシュマンは論じました。

なぜ衰退しつつある組織を想定する必要があったか、と言えば、それは、うまくいっている組織であれば、メンバーはその組織に満足しているはずです。ならば、組織は安定しており、メンバーは組織を裏切る必要もなく、リーダーたちもメンバーの裏切りを心配する必要はないでしょう。つまり、うまくいっている組織に関しては、忠誠心の問題は生じようがない、というのがハーシュマン理論の前提です。

たとえば、倒産の危機にある企業を思い浮かべてみましょう。あなたがその企業の社員だとしたら、どのような態度や行動を取るでしょうか。ハーシュマンによれば、一つの選択肢は、その会社を辞めることです。その会社が倒産する前に、経営がうまくいっている別の会社への転職を選ぶのです。これをハーシュマンは「離脱」と呼んでいます。

もう一つの選択肢は、その企業にとどまり、リーダーたちに体質の改善や業績を上げるために

意見することです。あなたが平社員なら、会社の再建案をいくら熱心に訴えても、リーダーたちは聞く耳を持たないかもしれません。ですが、会社が危機的状態にあるのを目の前にして黙ってはいられない、という態度。これをハーシュマンは「発言」と呼んでいます。

この「離脱」と「発言」という二つのキーワードを使って、ハーシュマンは忠誠心を説明します。彼によれば、忠誠心とは、人に「離脱」という選択をひとまず保留させ、「発言」することを促すものです。忠誠心を抱く人とは、自分が属する組織から逃げ出すことをせず、その組織を改善するため努力する人のことを意味する、ということです。

企業がまさに倒産寸前であることが誰の目にも明らかな場合、その「発言」は、企業のリーダーたちにとって耳の痛い内容とならざるをえません。つまり、「発言」とは、リーダーたちを批判する内容となります。こうしてみると、衰退しつつある組織において、リーダーたちを批判して「発言」する人こそが、その組織に忠誠心を抱く人だ、という結論になります。しかし、リーダーたちを批判することは、普通、従順ではないとみなされます。実際、リーダーたちにしてみれば、批判的な「発言」をする社員は目障りに思うものでしょう。むしろ、黙ってリーダーたちのいう通りに従う社員を忠実だと評価するものです。

ですが、ハーシュマンに言わせれば、リーダーの言うことにひたすら素直に従ったり、沈黙して発言しようとしていない人々は忠誠心のない人々だということです。なぜこのような食い違いが起きるのでしょうか？

それは、忠誠心の対象が微妙に異なるからです。ハーシュマンによれば、衰退しつつある企業の社員が「発言」するのは、企業全体の立て直しのためです。企業が全体として赤字を解消し業績を好転させるために、リーダーたちの指導方針や経営内容を批判するのです。一方、リーダーたちのいうことを素直に聞き、「発言」しない社員たちは、会社全体を良くしようと考えるのではなく、リーダーたち個人に忠誠心を抱いているのです。

さて、このように「発言」する「忠誠心」という話題は、東アジアの政治思想的な伝統では、「諫言」という概念をめぐって論じられてきました。たとえば、江戸時代の日本では、主君が不正に権力を行使したと考えられる場合、家臣が主君に忠告してこれを正そうとしたものです。このような家臣による忠告を「諫言」と言います。文字通り、主君を諫める「発言」です。

こうした考え方はもとと古代中国の儒教に起源があります。儒教の古典的経典といえは『論語』ですが、その中に次のようにあります。

「子路（注1）が主君につかえる心得をおたずねした。先生（孔子）はいわれた。『主君をだましてはいけない。そうして主君に逆らっていさめなければいけない』（憲問篇）」

このように、主君が間違ったことをするならば、その主君につかえる（つまり忠誠を尽くす）には、「主君に逆らっていさめなければならない」というのです。

これは親子関係でも同様です。再び、『論語』から引用しましょう。

「先生が言われた。『父母のおそばで用事をしていて、誤りを見つけたときには、まず遠回しに諫言申し上げよ。諫めをとりあげられない意向と察したら、つつしんでこれに違背しないようにし、心の中では憂慮していても、怨みをいだいてはならない』（里仁篇）」

父母が誤りを犯したと判断したら、失礼にならないよう注意しながら丁寧な諫言をなさい、というのです。

このように、主君が過ちを犯したら家臣がそれを諫めるのが、家臣の忠誠心というものであり、同様に、親が過ちを犯したら子供がそれを指摘するのが、親に忠実な子供の道だと儒教は教えています。

このように考えるのはなぜか、といえば、それは、主君には主君の果たすべき義務があり、家臣には家臣の果たすべき義務がある。親には親なりに果たすべき義務があり、子供にも子供なりに果たすべき義務がある、という考え方を儒教は採るからです。

『論語』にもこうあります。

「主君は主君らしく、家来は家来らしく、父は父らしく、子は子らしく」（顔淵篇）

こういうわけで、主君がどのようにふるまっても、無条件に家臣は主君の言うことを聞かねばならない、という考え方を儒教は採っていません。

それでは、その諫言を主君や親が聞き入れない場合はどうすべきなのでしょう。子が三度諫めても親が聞き入れない場合、子は泣く泣く親に従わなければならない、といいます。親子関係からなる「家」の秩序を乱してはならないと考えるからです。しかし、主従関係の場合はこれと異なります。三度諫めても主君が聞き入れないのなら、その主君のもとから去れ、というのです。

つまり諫言を聞き入れない主君には、諫言する家臣は服従する義務がない、というわけです。これは、ハーシュマンの理論に「翻訳」すれば、主君が「A」を聞き入れない場合、家臣は「B」して構わない、ということ、家臣は主君に対する忠誠心を放棄してよいということの意味します。

これが古代中国の儒教に起源を持つ「諫言」思想ですが、これが日本に入ってくるとその意味内容が大きく変化しました。この点を理解するのに、格好の素材は、江戸時代の思想書として有名な『葉隠』です。著者山本常朝は一六五九年に佐賀藩士・山本神右衛門重澄の末子として生まれ、肥前国佐賀藩当主・鍋島光茂に仕えた人物です。光茂が一七〇〇年に死去した際、剃髪して出家。隠遁生活を送る中、青年藩士・田代陣基に口述筆記させて成立したのが『葉隠』です。

この書物は、いわゆる「武士道」を論じた書物だといわれますが、この作品が執筆された時代は、関ヶ原の合戦から一世紀以上が経過し、すでに太平の世を迎えていました。侍は戦闘者としての役目を果たすことはなく、平和な時代の「役人」として生きていました。常朝自身も戦場で戦った経験はありませんでした。

さて、この『葉隠』の内容の大きな特徴は、主君への絶対無条件的な忠誠を説いている点です。

つまり、家臣は主君に対してどこまでも忠誠を尽くさなければならぬ、ということです。

先ほど古代中国の儒教的な「諫言」思想を解説した際、過ちを犯す主君に対して三回諫言しても主君が聞き入れないなら、その家臣は忠誠義務をキャンセルできると説明しました。『葉隠』の主張はこれと異なります。過ちを犯す主君に繰り返し諫言したにもかかわらず主君がそれを聞き入れなくても、家臣は主君に対して忠実であり続けなければならない、ということです。これは、主君が主君の道からどれだけ外れていても、家臣は家臣としての道に忠実でなければならない、ということの意味します。

ここから『葉隠』の論理は、さらに興味深い展開を示します。主君がたとえ暴君であっても、家臣は家臣としての忠誠義務をまっとうしなければならぬ、ということにとどまらず、無理難題を言う主君に仕えなければ、家臣は自分の忠誠心の深さが試されることにならない、ということです。だいたい、主君が名君であれば、賢明な判断をするでしょうから、いちいち諫言する必要はそれほどないはずです。諫言する必要があまりいとなれば、家臣の立場とすれば、忠誠心を実証する機会が少なくなってしまう。そこで、主君がとんでもなく愚劣であったり、ひどく無能だったり、あるいは暴虐非道で家臣にやたらと切腹を申しつけたりするようであれば、家臣は諫言する機会に事欠かないわけで、かえって望ましい、という奇妙キテレツな結論になります。

なぜこんな結論にたどり着くかといえば、ひとつには、家臣にとって忠誠の対象が主君個人であって、主君や家臣そして一般庶民を含むすべての人々にとっての全体の利益ではないからです。ハーシュマンの理論を紹介した際に、リーダー個人に忠実なのか、それとも組織全体の利益を優先するのか、を問題にしました。ハーシュマンの理論によれば、忠誠心とは、リーダー個人に対して忠実なことではなく、組織全体の利益を尊重することだったはず。これとは対照的に、『葉隠』はあくまでもリーダー個人への忠誠を問題とします。

「しかし、古代中国の儒教の場合も、リーダー個人への忠誠を問題にしていたではないか」

こういう反論があるでしょう。確かに、古代儒教の場合、『葉隠』と異なり、三回諫めても主君が聞き入れなければ家臣はその主君のもとを去ってよい、という結論でした。ただし、これは、主君には主君なりに家臣に対して義務を負っている、という考えがあるからです。一方、『葉隠』が想定する主君は、家臣に対して何の責任も負っていません。その結果、家臣には無限に忠誠心を示す義務が生じるわけです。『葉隠』の論理をハーシュマン理論に「翻訳」すれば、家臣には「発言」することが求められるが、「離脱」の機会はない、ということになります。

しかし、ここでひとつ注意すべき点があります。家臣は暗愚な主君や暴虐な主君に「発言」（＝諫言）することで忠誠心を示そうと無限に努力すべきだと『葉隠』は主張するのですが、家臣が「発言」する目的とは、主君がより優れた判断や行動を取るようになることではないのです。『葉隠』によれば、家臣が諫言をするのは、主君が暗愚だったり暴虐非道だったりするのが天下に明らかにならないよう隠すためなのです。主君がダメなリーダーだという悪評が世間でたたないように、諫言は陰でコソコソ行うべきだということです。

これは悪い主君をよりよい主君にしようとする意図はなく、もはや手に負えないから、責任を取らせて退位を迫る、というような姿勢とは対照的⁵です。むしろ権力が腐敗し墮落していくのをひたすら隠し通そうとする論理に他なりません。私たちは『葉隠』のような態度には批判的⁵に

峙（注2）する姿勢を学ぶ必要があります。なぜなら、

X

からです。

（将棋面貴巳『従順さのどこがいけないのか』による）
（問題作成のために、本文を一部省略・改変したところがあります）

(注1) 子路……人名。孔子の弟子の一人。

(注2) 対峙……向き合って立つこと。

問一 傍線部①「ハーシユマンは『離脱』と呼んでいます」とありますが、「離脱」とはどうすることですか。それを説明した次の文章の空欄に入る言葉を、本文から十四字で抜き出しなさい。

危機に際して、

十四字

こと。

問二 未来君は傍線部②「なぜこのような食い違いが起きるのでしようか」に着目し、ハーシユマンの考える忠誠心のある社員と一般的に考えられる忠実な社員の違いについて、次の表にまとめました。この表のⅠ・Ⅱに入る言葉を書きなさい。

	ハーシユマンのとらえ方	一般的なとらえ方
リーダーに対する 行動のしかた	Ⅰ	黙ってリーダーの 言う通りに従う
忠誠の対象	Ⅱ	リーダーたち個人

問三 空欄

A

、

B

に入る語句を本文からそれぞれ抜き出しなさい。

問四 傍線部③「これが日本に入ってくるとその意味内容が大きく変化しました」とありますが、日本の諫言思想はどのような点にその特徴がありますか。「諫言」・「主君」という語を用いてその特徴を書きなさい。

問五 傍線部④「かえって望ましい」とありますが、このように言えるのはなぜですか。その理由を書きなさい。

問六 傍線部⑤「私たちは『葉隠』のような態度には批判的に対峙する姿勢を学ぶ必要があります」について、その理由を述べた文章が空欄

X

に入ります。あなたなら空欄

X

にどのような文章を入れますか。本文を踏まえて、四十字～七十五字で書きなさい。

二 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

一月十七日の明け方に起きた阪神・淡路大震災は、神戸を中心に一月末の時点で五千人以上の死者を出し、負傷者は四万人以上にのぼった。
被災二日後に祖母はこの家に身を寄せ、それから二週間がたつ。しかし震災の日起きたことを一切語らない。ただ、夜は寝巻を着ないで、いつでも外に出られる服を着て眠る。そしてあかりを消さないでほしいと言う。

A 豆球のあかりの下で、祖母がすすり泣いている。

泣き声を聞くのがつらくて、奈津子はヘッドボードに置いたミニコンポに手を伸ばす。ヘッドフォンを耳にかけようとすると、祖母の声がした。

「なっちゃんは……音楽が好きなん？」

「好きっていうか……」

「いつも……何、聴いてるん？」

「言っても、お祖母ちゃんは知らないよ」

「そうやな、と、祖母が再び涙をすすった。」

寂しげな口調に気がとがめ、奈津子はヘッドフォンを元に戻す。

神戸に遊びにいったとき、祖母はもっと強めの関西弁を話していた。家に来てからは方言が控えめだ。

この街の方言には関西弁と名古屋弁が入りまじっている。① 普段より、関西弁のイントネーションを強めて祖母に語りかけた。

「ミスター・チルドレンってバンドの歌、聴いてる。『innocent world』とか『Tomorrow never

ノウズ knows』って題の歌」

知らんなあ、と祖母が深く息を吐いた。

「トウモロウなんとかって……どういう意味？」

「明日のことはわからない」

祖母はそれきり、何も言わなくなった。

眠ったのかと思い、奈津子はちらりと横目で見る。

祖母の掛け布団が細かく震えていた。その様子に驚き、あわてて身を起こす。

枕に顔を押しつけ、声を殺して祖母は泣いていた。

「あしたの、こと……ほんとに……わからん」

見てはいけない気がして、奈津子はベッドに横たわり、天井を見る。

チロ、と祖母がつぶやいた。祖母が飼っている犬の名だ。

お祖母ちゃん、とためらいながら奈津子は声をかけた。

「チロはどうしてるん？ 誰かに預けてきた？ もし、そうなら、そろそろ迎えに行ってもいいんじゃない？」

チロがいれば祖母の気持ちも晴れる。一緒に散歩をすれば、外出も楽しめるようになるだろう。動物が苦手な父は、きつとチロを連れてくるのを拒んだのだ。

チロ、と祖母が再びつぶやいた。

「チロは死んだんよ……」

「いつ？ まさか震災で？」

「あの朝、チロが小屋でワンワン吠えて。なんでそんなに吠えるのって、叱りに出ていったら、地面が揺れて……。ばあちゃんは助かったけど、チロに瓦が……」

チロだけやない、と祖母がぐもった声で言った。

「お向かいの家の子……。小さな子も……」

祖母の背中が激しく震え、布団から肩がのぞいた。

「何もしてやれんで。ただ一生懸命、ばあちゃんたち、さすってやるしかできなくて……」

ベッドを下り、奈津子は祖母の布団の脇に膝をつく。

祖母が枕の端を指でつかんだ。その手も震えている。

「爆発するかもしれんから、避難するようにって言われたけど……すぐには逃げられへん。なのに、火……火が……」

祖母が嗚咽をもらした。震える背中に触れると熱い。その感触に驚き、奈津子は手を引っ込める。真冬なのに、骨張った祖母の背はひどく汗をかいていた。

「ごめん、ごめんな、なっちゃん」

「大丈夫やから。私は全然……謝らんといて。お祖母ちゃんは何も悪いことしてへん」

祖母をいたわりたいが、どうしたらいいのかわからない。おそろおそろ、奈津子は祖母の肩に手を置く。

その手に自分の手を重ね、祖母が慟哭した。

「なんで、こんな年寄りが生き残って……あんな若い子おらが……。高雄にも昭子さんにも迷惑かけて」

「お祖母ちゃん……み、水、持ってくる」

祖母の手から自分の手を離し、奈津子は階段を駆け下りる。

洗面所のタオルをつかみ、コップに水をくんで部屋に駆け戻ると、祖母がティッシュを顔に当て、涙をぬぐっていた。

祖母の枕もとに正座をして、奈津子は祖母の顔を見下ろす。

「お祖母ちゃん……寂しい？」

「寂しいのは、みな同じ。ただ……」

チロ、と祖母がつぶやいた。

真っ白な毛のチロを思い出すと、コーシローの姿と重なった。

祖母の気持ちを少しでも紛らわせようと、奈津子は必死で会話をつなぐ。

「うちの学校……高校ね、犬がいるんだ。白くてムクムクした毛の」

祖母は黙って目を閉じた。

「高校は八高って呼ばれてるんだけど、犬の名前はハチコウじゃなく、コーシロー。すごく自由で。教室で寝てたり、野球部のボールを追いかけてたり」

祖母は何も言わない。当たり前だ。知らない犬の話聞いても、何のなぐさめにもならない。

正座をしている足がしびれてきた。そっと足を崩したとき、祖母がたずねた。

「先生方は……何も言わんの？」

「コーシローのこと？ 言わんよ。昔からいるし。先生より古いかも」

先輩なんや、とつぶやく祖母に、「そうだね」と奈津子は語りかける。

「コーシロー先輩だ」

見下ろしている祖母の顔がわずかにほころんだ。その顔に奈津子はささやく。

「卒業式に来てよ、お祖母ちゃん。そしたらコーシローに会えるから」

「白い、ムクムクの、ワンちゃん……」

祖母がかすかに微笑み、やがて寝息が聞こえてきた。

この街に来て初めて祖母は外出して服を買い、母と一緒に卒業式に出席してくれた。

第一志望の大学に合格して上京する朝、奈津子はその折に撮った写真を祖母に渡した。コーシローを間に挟んで、祖母と二人で並んでいる写真だ。

祖母が目を細めて写真を眺めた。

「ああ、可愛い、可愛い。チロがなちゃんと並んでいるみたいや」

祖母が写真のコーシローを撫でている。大切そうにその写真をポケットに入れると、代わりに白い封筒を出した。

「なっちゃん、これ。新幹線のなかで何か食べて」

「いいよ、東京まであつという間。食べてる暇ないから」

祖母に封筒を返すと、思いのほか強い力で押し戻された。

「そう言わんと。食べる暇がないなら、レコードでも買うて」

「レコードはもう売ってないよ、CDの時代だから」

「シーディ？ シーディってのはこれで買えんの？ もっとするん？」

「買えるけど……。でも、いいって、お祖母ちゃん。それよりテレビを買いなよ。そうしたら二階でのんびりテレビを見られる」

それが五日前のこと――。

³ あれは、受け取るべきだった。

居間にしつらえた祭壇^{さいだん}の前で寝ずの番をしながら、奈津子はぼんやりと考える。

一昨日の朝、祖母は布団^cのなかで冷たくなっているのが見つかった。眠っているうちに他界したのだ。

^D 東京のアパートから実家に戻ると、祖母は居間に寝かされていた。

穏やかな表情の顔に触れると冷たい。その感触に、あの冬の夜に触れた、祖母の背中の **A** と

B を思い出した。

あのとき、祖母は全身で泣いていたのだ。愛しいもの、小さな者に何もしてやれなかった自分

を責めて。

そうだとしたら、あのお金は取るべきだったのだ。

好物を食べるか、CDを買うかして、祖母にお礼を言えばよかったのだ。

礼服を着た父が居間に入ってきた。隣に座って、あぐらをかく。

「すまん、奈津子。東京に行つて、すぐに戻つて、疲れたやろう。なのに寝ずの番までさせて」

父の言葉に我に返り、奈津子はなるべく冷静な顔でろうそくに火を点ける。

父が礼服の内ポケットから写真を取り出した。

「これ、奈津子に相談しようと思つて。お前がいやなら入れないが、お祖母ちゃんの棺^{ひつぎ}に入れてやつてもいいか？」

その写真は、卒業式のとくに撮ったものだった。コーシローを挟んで、よく見れば似た顔の祖母と自分が笑っている。

こうして見ると、姉妹で共通しているぼつてりした唇は、明らかに祖母の遺伝だった。父が写真をじつと見つめている。

「この写真、『なっちゃんがくれた』って、お祖母ちゃん、ずいぶん大事にしてな……。亡くなつたときも枕元に置いてあつた。奈津子がいやでなければ一緒に持たせてやりたい」

「いいよ、フィルムはあるから、いつだって写真に焼けるし」

そうか、と言って、父が礼服に写真を戻した。代わりに煙草^{たばこ}を出して、マッチで火を点ける。

「お父さん、禁煙したんじゃないの？」

「こんなときぐらい、吸つてもいいだろう」

父がゆつたりと煙草を吸い、深く息を吐き出した。

^E 「お祖母ちゃんが死んだ夜は、久美子がアルバイト代でお祖母ちゃんにイチゴを買ってきて……。喜んで食べて、週末はみんなでカートを買いにいこうって話をした。奈津子の卒業式以来、お祖

母ちゃんは少しずつ外に出るようになったから。転ばないようにって、お母さんがショッピングカートをプレゼントしようって言って……」

いい夜だった、と父がつぶやき、吐いた煙の行方を見上げた。

「だけど悔やまれる。この家に来て、お祖母ちゃんは幸せだったんだろうか」

「だと思……」

そう思わないと、今にも泣いてしまいそうだ。

父が肩を落とし、背を丸めた。

（伊吹有喜『犬がいた季節』による）

（問題作成のために、本文を一部省略・改変したところがあります）

問一 傍線部①「普段より、関西弁のイントネーションを強めて祖母に語りかけた」とありますが、それはなぜですか。理由を書きなさい。

問二 傍線部②「高雄にも昭子さんにも迷惑かけて」とありますが、「お祖母ちゃん」が身を寄せている「この家」に来てから周囲に遠慮している様子がその他の表現からも読み取れます。その表現を含む一文を見つけ、最初の五字を抜き出さない。

問三 傍線部③「あれは、受け取るべきだった」とありますが、なぜ奈津子はそのように考えたのですか。奈津子が考えた理由を書きなさい。

問四 空欄 **A**、**B** にあてはまる言葉を本文から抜き出さない。

問五 太字傍線部AからEについて、時間の流れに沿ってそれぞれの出来事を順に並び替えると、どのようなになりますか。時間の順となるよう、解答欄に記号で答えなさい。ただし、Aは先頭にきます。

問六 二重傍線部「ただ……」とありますが、この「……」にはお祖母ちゃんの様々な思いが込められていることが読み取れます。その思いをお祖母ちゃんが語るように七十字以内で書きなさい。

三 次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文（文節で区切っている）の主語と述語を記号で答えなさい。文中になければ「なし」と答えなさい。

- (1) 職人たちが高度な技術と情熱で伝統文化を継承した。
(2) 昨日、公開された新作の映画が早く見たい。

問二 下の意味を読み、□にあてはまる最もふさわしい言葉を、漢字一字で答えなさい。

- (1) □に短し、たすきに長し （意味）どっちつかずの中途半端で、役に立たないこと。
(2) 忠言□に逆らう （意味）人の忠告は、なかなか聞き入れるのが難しいこと。

問三 次の文を読み、線部を正しい尊敬語または謙譲語に直しなさい。
ただし「くれる・られる」という形は用いないこと。

- (1) 今度私は市長から賞状をもらう。
(2) 校長先生が私に「さようなら」と申し上げる。

問四 次の作品の中から「宮沢賢治」の著書を、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア ごんぎつね イ 南総里見八犬伝 ウ ことり エ オツベルと象

問五 次の各文の線部を漢字に直しなさい。

- (1) 提案にイギを申し立てる。
(2) 全員のソウイによって決定する。
(3) 大きな声で開会をセンゲンする。
(4) 有名な先生にシジする。
(5) 義務教育のカテイを終える。
(6) おじはキョウドの名士だ。

*印には記入しないでください。

座席番号

受験番号	氏 名
------	-----

*

一

問六				問五	問四	問三	問二		問一
75 からです。						A	II	I	

*

二

問六				問五	問四		問三	問二	問一	
				A ↓ ↓ ↓ ↓	B	A				
70										
60										

*

三

問五		問四	問三		問二	問一				
(4)	(1)		(2)	(1)	(1)	(1)				
							主語			
							(2)			
								述語		
(5)	(2)									(2)
										主語
										述語
(6)	(3)									

*
